

新型インフル

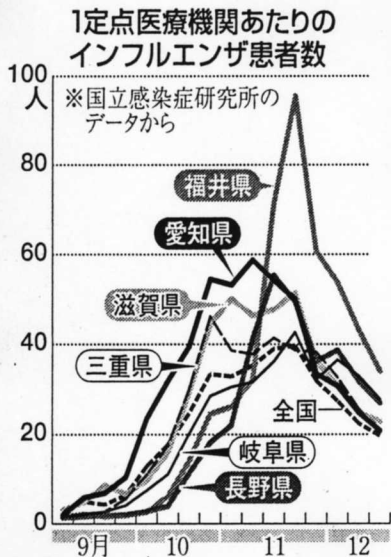
新型インフルエンザの流行を示す指標が、昨年12月から減り続けている。「昨秋からの流行はピークを過ぎた」とみる専門家がいる一方で、厚生労働省は例年の季節性の流行水準は維持しているとして「警戒は続けて」と呼び掛けている。

減少傾向でも 油断禁物

全国約五千の定点医療機関について同省が七日発表した最新一週間(十二月二十一〜二十七日)の一機関当たりインフル患者数は、一九・六三人で四週連続下落。昨年十二月中旬から、警報レベルの三〇人を大きく割り込んでいる。

名古屋市長の中島捷久名誉教授(ウイルス学)は「ウイルスに変異が見られず、感染の中心だった小中学生は約七割が感染するなど、多くの人に免疫ができています。学校再開で小さなピークがあるかもしれないが、大きな流行は過ぎた」と話した。

今後、季節性インフルが流行する恐れについても、中島名誉教授は「通常の年ならもう季節性の感染が始まる



厚労省「うがいと手洗い続けて」

「国産ワクチンの接種希望者はまだ多く、需要はある」と説明。海外産ワクチン九千九百万回分を輸入し、二月にも接種が始まる見通しだ。

一方で、新型インフル感染による六日までの死者数は計百四十六人。厚労省の中嶋建介感染症情報管理室長は「持病がある人や高齢者は死亡率が高く、感染すれば命の危険がある。沖縄など再び患者が増えている地域もあり、うがいや手洗いや、うがいを手洗いなどで警戒は続けてほしい」と呼び掛けている。

ワクチンは予約キャンセルが始め、輸入予定の海外産ワクチンが余る可能性が指摘されているが、同省は「

ている時期。今冬は流行しないだろう」と分析した。